大きく成長した10年間
彩りと実りある田んぼアートへ

水田に色の異なる稲を植えて絵を描く田んぼアート。平成20年度に始まったこの取り組みも今年で10年目を迎えました。ここでは、多くの人に支えられながら、毎年成長を続けてきた田んぼアートの10年間を振り返ります。

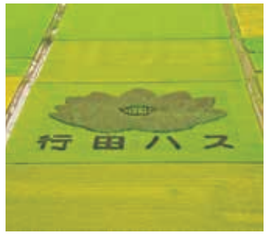
成長し続けてきた10年間

田んぼアートは、「行田のおいしいお米や観光地としての行田を広くPRしたい」という思いから地元農家や関係団体で構成された「田んぼアート米づくり体験事業推進協議会」が主体となり、平成20年度にスタートしました。

当初は約20アール（2千平方メートル）の面積でしたが、平成21年度には約60アール（6千平方メートル）、平成22年度は約130アール（1万3千平方メートル）と少しずつ規模を拡大。また、図柄も毎年さまざまなテーマを取り上げています。平成20・21年度は「行田蓮」、平成22年～24年度は小説「のぼうの城」、平成25年度は「古代蓮の精」、平成26年度は「古（いにしえ）の行田」と、面積の拡大とともに描かれる絵も複雑になり、使われる稲の種類も増え、色彩もより豊かなものに変化していきました。

そして、平成27年度には「未来へつなぐ古（いにしえ）の軌跡（きせき）」をテーマに、古代蓮、地球、子供たち、宇宙、小惑星探査機はやぶさ2を約280アール（2万8千平方メートル）の田んぼに描き、ギネス世界記録®に挑戦。2度目の挑戦でついに「最大の田んぼアート」として念願のギネス世界記録に認定されました。さらに、翌年には誕生30周年を迎えた大人気ゲームシリーズ「ドラゴンクエスト」とのコラボレーションも実現し、7月には隣接する古代蓮会館の月間入館者数が過去最高の4万4千504人を記録しました。

平成27年度には念願のギネス世界記録®に認定



平成20年度
開始当初の田んぼアート

〝人〟に支えられてきた田んぼアート

今では広く知られるようになった行田の田んぼアートですが、これは毎年多くの方々の協力のもと制作されてきたものです。事業を実施している同協議会もこの10年間で委員や協力者が増えてきました。中でも地元農家の皆さんには本業の傍ら生育や圃場の管理など田んぼアートの根幹を担う農作業を手伝っていただいています。また、関係団体には田んぼアートの田植え当日に多数の応援職員を派遣していただいている他、多種にわたる苗づくり、害虫から稲を守るため無人ヘリコプターによる防除作業など専門家として助言・協力をいただいています。この事業を始めた当初には、田んぼアート発祥の地である青森県田舎館村に測量や苗の育て方などについてアドバイスをもらい、その後も毎年色苗の種も提供していただいています。

さらに、田植えの参加者も年々増えてきました。平成21年度に募集を開始した際の田植え体験参加者は115人でしたが昨年度は721人までに。平成23年度からは面積の拡大に伴い、一般の田植え参加者とは別に田植えボランティアを募り、毎年約500人が参加しています。市民活動団体や高校生などで構成される同ボランティアは、アートの出来栄えを左右する絵柄などの細かな植え分けが必要となるエリアを担当しています。こうしてみんなの手で作り上げる田んぼアートは毎年見る人に感動を与えています。

協議会員や田植えボランティアの皆さんによる田植え

全国で広がる田んぼアートの取り組み

近年では、田んぼアートに取り組む自治体や農業団体なども全国的に増えてきました。毎年全国各地で「全国田んぼアートサミット」が開催され、平成29年度には全国田んぼアート連絡協議会も立ち上がり、公式サイトも公開されています。本市の同協議会も、これらの活動に参加しており、他の団体などと交流を深めながら、田んぼアートによる地域活性化や農業振興の推進を図っています。

10周年、そしてこれから

多くの人に支えられ、今日まで続けてこられた田んぼアート。節目となる10年目の今年は、古代蓮の里東側と南側の田んぼに2つのアートを展開。東側には、稲田の守護神や美田の女神として親しまれているイナダヒメノミコトとヤマタノオロチ伝説で知られる夫のスサノオノミコトを描きました。そして、南側には池井戸潤さんの小説「陸王」（集英社刊）がTBSテレビ日曜劇場でドラマ化されることを記念し、「陸王」の書影や主演の役所広司さんの似顔絵を描き、連日多くの来場者の目を楽しませています。

地上から見てもはっきりと色の違いが分かる稲

これからも、同協議会は、行田のおいしいお米や魅力を発信していくため、さらなる成長を続けていきます。

▼問い合わせ　同協議会事務局（農政課内・内線386）

インタビュー

田島 金藏さん、房子さん（小針）

田んぼアートを始めた頃から、水の管理を担当しています。一日何回も田んぼの様子を見に行ったり、周辺との調整をしたりと大変なこともありますが、その分愛着が湧きます。絵が浮かび上がるとうれしくなり、親戚や友人にも田んぼアートを紹介しています。

國井 秋弥（ときや）さん（小針）

もともと田植えに興味があり、昨年度から友達と参加しています。たくさんの人が田んぼアートの田植えをしていることに驚きました。実際に自分が植えてみると田んぼアートがそれまでと違って見えます。ぜひ、同年代の中学生もボランティアに参加してみてほしいです。